

高山の文化を築いた人々

21

栃目不動堂の壁画

三島常馨

真蓮寺住職 三島多聞

を発見した。『拝啓当院第三十回展覽会への御出品物 左記の通り入選仕り候間御通知申上候 昭和十八年八月三十日 日本美術院 老僧』。「老僧」という作品が入選した通知である。

これに応えて福田夕咲氏や真木潔氏から、新聞で入選を知ったお祝い申し上げるという便りがあった。

戦時中、あえて「老僧」という題で出品した理由は、本人でないの知る由もないが、仏典の「兵戈無用」の叫びを訴えたかったのではないかと思うのです。後日、昭和二十七年に「栃目不動堂の壁画」（七日町二丁目）十五枚を作品化したのも、終戦八年目の事であるので“祈り”のような心情が基調にあったと思われる。翌年二十八年には高山市仏教会が主体となつて養護施設趣意書を発表し、三十一年には「飛驒慈光会」が設立され、慈光園の園長になつている。

これらの活躍もまた作品創意の中の一展開であつたと思う。一人の僧として、また「富丸」と号して、絵画（春陽会員）、彫刻に精を出した人生を思う。

過年、岐阜県立美術館で飛驒の絵画研究を展開し、作品が数点選ばれて展示され、続いて高山市民文化会館でも展示があつた。その中に栃目不動堂の壁画も展示された。

栃目不動堂の壁画制作の時は戦後のこともあつて、良質の絵の具が手に入らず、松華堂さんにいろいろ無理をいつて調達してもらつたことを母から聞いている。

足し、初代会長。飛驒美術作家連盟創立メンバーであつた。また、高山市文化財審議会長を歴任した。

代表作として、高山市国分寺境内の「悲母観音像」、宮村水無神社境内の「上杉一枝像」などの彫刻がある。

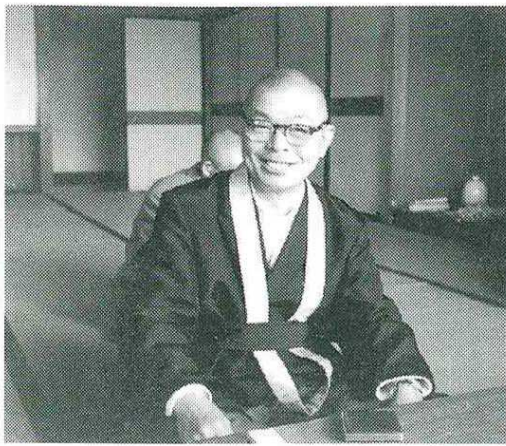


栃目不動堂の壁画制作中の常馨。壁画は現在、香煙ですすけ、はっきり見ることができない。

昭和四十九年八月、真蓮寺の住職であつた父、三島常馨が亡くなり、私は父のアトリエを整理することとなつた。

スケッチブックが沢山出てきた。その中で戦時中のスケッチの色彩が非常に暗いことに気がついた。そして、月刊の絵画雑誌の記事に、ある評論家が次の趣旨のようなことを記していた。

“今は戦時中である。絵画も時代のものなら、戦意を高揚すべき作品がもつと沢山作られるべきだ。”と。父はそこに朱線を引き、強烈なまでの反抗メモを残していたのを覚えている。父の手文庫の中に次のハガキ



昭和十六年飛驒美術協会が発